

精霊は、やっぱりいるのかな？

わたしは精神分析学の門外漢だが、それでもアメリカ生まれのバスケットリーが日本に来て独自の進化を遂げた様を見ると、そこに精神分析を加えてみようという気持ちを抑えきれなくなる。その進化の様が、ちょうどBASEBALLが野球に変貌したときのように、日本文化の土壌にたっぴりと影響されていたからだ。

バスケットリーとは、籠（BASKET）が突然変異のように芸術作品と化した、新しい造形分野である。1970年代に登場し、日本には1980年代に入ってきた。移植の功労者は関島寿子だが、ここではその名を記すことに止めさせてもらいたい。

バスケットリーが日本でどんな風に独自化したかといえば、アメリカでのそれは近代芸術の延命策だったのに対し、日本ではそれはむしろ近代芸術からの離脱法になったという点にある。日米のどちらでも、バスケットリーは籠づくりの技法から〈編む〉、〈組む〉といった自然法則を抽出し、それを作品制作の基本原則に据えたところまでは同じだった。

だが、その後が違った。彼の国では自然法則への回帰は、自己省察で麻痺し・梗塞していた芸術の精神的表現に元気を回復させるカンフル剤としての役割を担ったが、これに対して日本では、それは近代芸術には精神的表現が不可欠だという強迫観念から自己を解放させる手段となっていった。アメリカでのバスケットリーは自然法則を「利用」し、日本のそれは自然法則に「帰依」した、といったら言い過ぎだろうか。

こんな風に、日本文化は現代でもそのちょっとしたクレバスから、自然に対する宗教的な、有り体に言えば神憑り的な認識を噴出させる。やはり今でも、日本には精霊はいるのかな？

具体例で言えば、本間一恵は日本人の「自然」認識を、化学、物理学、生物学のレベルにまで還元して捉え直そうとする。本間にとって、科学は人間の理性では構想しえないフォルムを現出させる自然の神秘であるらしい。星野泰子は技法——それも〈編む〉、〈組む〉のように近代の〈知〉が体系化した技法ではなく、その分類から漏れた技法にこそ、「自然」認識の妙味が潜んでいると想定する。そこから珊瑚のような姿が現れる。

どちらも本当は現代人の知的探求なのに、それをこの二人は「反-人間」的な所作と考えているところが面白い。ここに、日本土着の造形表現が垣間見える。

美術史家 樋田豊郎



メビウス-broad band
2006年
45x35x35cm
梱包用紙バンド 補染
コイルング技法

本間一恵 HONMA Kazue 「編む」という方法は、シンプルで手軽な造形手段である。特別な装置や道具も必要なく、素材も限定されない。線状の材料が、お互いに上になったり、下になったりして動く様子も、近づいて見れば明白だ。そんな、何の秘密もない編み目の集合が、全体のかたちを作り出し、それを支えている。どのような編み目をどのように増殖していくか。私の意図と、どうにもならない自然法則と、諸々のいいかげんさが巻きこまれながら、一日一日が積み重なる。

略歴 1953年 東京都生まれ
1975年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1982年 東京テキスタイル研究所バスケットリークラスにて関島寿子に学ぶ
「バスケットリー展」に第1回から参加、今年で20回を迎える国内外、個展、グループ展多数
現在 バスケットリーニュース編集人 和光大学共通教養科目講師 京都造形芸術大学染織通信教育部講師
<http://ait.shinchaku.com/artist/8.php>



グリーン
2005年
11x11x10cm
手漉き和紙
プライスプリット技法

星野泰子 HOSHINO Yasuko かがの技法を展開して、どのような造形が可能だろうか。素材と組織の関係性を追求し、実験しながら立体を作ることは、とても魅力的な作業である。今、私が魅せられているのは、プライスプリット技法である。ラクダの帯を作るインドの技法で、素材の撚りの間をもう一方の素材が通ることで、組み目が決まっていく。芯材に対してはたつきかける、かごのトワイニング技法とは、逆の発想だ。立体制作の、プロセスの多様性の面白さを見て欲しい。

略歴 1952年 横浜生まれ
京都造形芸術大学通信教育部芸術学コースにて、芸術学を学ぶ
1995年 デザインフォーラム '95公募展（東京）
2001年 「第2回 清州国際工芸ビエンナーレ 工芸公募展」 Cheongju ArtsCenter（韓国）
2004年 「Beyond Tradition: Contemporary Ply-Split Fiber Sculpture」 Contemporary Crafts Museum & Gallery ポートランド（U.S.A）
「バスケットリー展」に第6回から参加今年20回を迎える
<http://ait.shinchaku.com/artist/84.php>

石井太の眼…… ② 縁・結・美

HONMA KAZUE HOSHINO YASUKO 本間一恵・星野泰子

3/12(mon) — 3/21(wed)
2007
12:00 — 19:00 (日曜休廊)

岸辺に打ち返される波、浜辺に寄せては引いていく潮。朝・昼・夜という一日の繰り返し。アートは、はるか昔から繰り返される時間に生きています。この時間の奏でるリズムと響きあい、生息を続けています。「石井太の眼」では、めまぐるしく変わるアートシーン、消費されデータのみが残る現代アートの現状に対し、人間と自然との根源的な関係を求めているアーティストを紹介します。



メビウス-broad band



グリーン

共催

AIT

NPO法人 アート・インタラクティブ東京
ART INTERACTIVE TOKYO

NPO法人（特定非営利活動法人）「アート・インタラクティブ東京」は、現代の美術状況に関する多くの情報を、美術コレクターに公開することを目的としています。実際に美術作品を購入し愛好する人たちが、より広範な情報のなかから、個人の好みや考えのもとで美術作品を選べるようになることを支援し、そのことによって、日本美術が愛好者自身の「眼」によって発展するようになることを目指します。